成吉思汗廟の創建

田　中　　剛

は　じ　め　に……113
Ⅰ　日本の内モンゴル侵略と「チンギス・ハーン」……114
Ⅱ　「チンギス・ハーン神社」と国家祭祀 ……119
Ⅲ　成吉思汗廟の造営……125
Ⅳ　成吉思汗廟と戦時動員……130
お　わ　り　に……134

は　じ　め　に

2006年はチンギス・ハーンの即位（1206年）から数えて800年にあたる。これにあわせた記念行事や関連本が世界各地に溢れたことは、いまだ記憶に新しい。中国でも内蒙古自治区のウランホトでは、7000万元を投じて市内の成吉思汗廟などを一大観光拠点とする計画がスタートした[(1)]。この成吉思汗廟が創建されたのは、「満洲国」時代のことである。神社や忠霊塔など日本人が「満洲」に立てたモニュメントは、日本の敗戦後に尽く破壊された。成吉思汗廟も文革中に一時荒廃していたが、内蒙古自治区成立40周年の1987年に修復され、蘇ったのである。

では、成吉思汗廟とはそもそも何だったのか。試みに、日本人関係者の編纂になる『満洲国史・各論』を引くと、次のような説明がある。

> 蒙民厚生会のきも入り（ママ）と満洲国内蒙古人の総意により1944年10月興安（もと王爺廟）〔現在のウランホト―筆者〕の台地に壮麗な成吉思汗廟を建立した……爾来、国内蒙古人はもとより蒙疆の徳王はじめ国内外蒙古人の参詣が年々増加し、ラマ教の振興に貢献した[(2)]。

一方､現在の内モンゴルでどのように解釈されているかといえば､『蒙古民族通史』では、「満洲国」皇帝溥儀が「天照大神」を国神として奉祀し、東北各地で次々と「建国神社」が創建された当時にあって、成吉思汗廟の創建は日本の文化侵略と精神麻酔に対するモンゴル族人民の抵抗であった、と評されている[(3)]。

双方の認識にズレのあることが確認できよう。すなわち、日本の関係者は成吉思汗廟の創建を「ラマ教（チベット仏教）」の「振興」といい、モンゴル人は日本の文化侵略に対する「抵抗」と見做すのである。しかも、双方はズレを孕みながら、ともに成吉思汗廟を積極的に評価しているのである。さらに中国では、2006年5月25日に国務院が全国重点文物保護単位の一つに指定している。中国政府をあげてこの成吉思汗廟を文化遺産、革命伝統として評価していることがわかる。だが、そもそも成吉思汗廟についての歴史学的研究は乏しく[(4)]、不明な点も少なくない。たとえば、その着工日ひとつを取ってみても、1940年5月5日や1941年5月、諸説入り乱れて定まっていない[(5)]。今日のモンゴル民族のアイデンティティにもかかわる問題であるから、成吉思汗廟が創建された歴史的流れを踏まえておく必要があろう。そこで本稿は、成吉思汗廟が創建される経過とその機能について考察するものである。

Ⅰ　日本の内モンゴル侵略と「チンギス・ハーン」

日本による内モンゴルの直接支配は、1931年9月の満洲事変に始まるのであるが、その淵源のひとつを遡れば､「国家と宗教」という近代日本において絶えずつきまとっていた問題の影を確認できる。

1924年2月、第一次大本事件で保釈中の大本教「聖師」、出口王仁三郎はひそかに日本を脱出し、朝鮮半島を経て内モンゴルに入った。これより先､「大正維新」「祭政一致の天皇神政」をうたう王仁三郎の教説が、天皇制国家の秩序原理に矛盾する不敬罪にあたるとして大本教に加えられた国家権力からの弾圧が1921年の第一次大本事件であった。この事件を契機に王仁三郎は教団の体質改善に着手し、世界平和と人類愛を説き、あらゆる宗教の普遍的価値の一致、すなわち「万教同根説」を強調した。日本の「惟神の大道」こそが最も普遍的価値を体現したものであり、そこに万教が帰一すると確信したのである。王仁三郎の「入蒙」は大本教による「世界経綸の第一歩」、理想の宗教国家「大本教王国」をモンゴルにつくろうとするものであった。

結局、そのあまりにも突飛な計画は無残なまでに失敗するのであったが、モンゴル人たちは王仁三郎の出自を次のように信じていたという。チンギス・ハーンの子孫に生まれた

王仁三郎は幼くして父を失い、日本人と結婚した母に連れられて日本に渡り、一派の宗教を樹立するまでに成長したが、滅亡に瀕するモンゴルを救治済度するために戻ってきたチンギス・ハーンの再来であると[(6)]。このエピソードはむしろ王仁三郎の自覚の裏返しとみた方がよかろう。王仁三郎はモンゴル宣教で源日出雄という変名（源義経の「源」）を自ら用い、源義経が北海道から大陸に渡り、モンゴルでチンギス・ハーンと名乗って皇帝の位についたという「義経＝チンギス・ハーン説」を語っていた。王仁三郎は自らを源義経＝チンギス・ハーンの後裔であると自覚していた。

ともあれ、王仁三郎にとって「チンギス・ハーン」がモンゴル宣教の精神的よりどころであったことは、この頃の時流をよく反映している。王仁三郎「入蒙」の年、1924年11月には小谷部全一郎の『成吉思汗ハ源義経也』が出版され、「義経＝チンギス・ハーン説」が世間の関心を呼び起こしていた。その流行を後押ししていたものは、日本人のアジア諸民族に対する優越感と大陸進出の野望であった。

モンゴル人の信仰をあつめるチベット仏教に王仁三郎が無関心だったわけではない。にもかかわらず、「チンギス・ハーン」が心をとらえたのは、王仁三郎の思惟様式による。王仁三郎の思想は、ラディカルな国家主義的神道思想ゆえに、人類同胞主義であった[(7)]。万教の本源的な一致を説き、大本教による世界の精神的統一を理想とする強い宗教的信念が、民族・国家の枠を超えて世界帝国をうち立てたチンギス・ハーンの事績に共鳴したのである。

さて、王仁三郎がモンゴルから帰国した1924年夏ごろ、中央大学学生の笹目恒雄が門司から大連に渡った。シャマニズムの立場から騎馬民族を研究したいと思った笹目は、夏休みを利用して中国東北地方やフルンボイル、外モンゴルを放浪した。このとき、外モンゴル・オノン河近くの山頂で「チンギス・ハーンの精霊」を感得し、モンゴル人の日本留学事業を思いつく。帰国した笹目はその足で京都綾部を訪ね、再保釈されたばかりの出口王仁三郎から「入蒙」の話を聞いた、という[(8)]。以上の経緯を伝える笹目の自叙伝には、いくらか脚色が加わっていると思われるが、少なくとも宗教的情熱が一青年を留学生事業に突き動かしたことは確かであろう。

その後、笹目は1927年ごろ再度モンゴルに渡り、蒙旗師範学校校長のメルセーを訪ねるなどして、モンゴル人少年7人を連れて帰国した。王仁三郎から横浜根岸の大本教「関東別院」を提供され、ここに蒙古青少年道場「戴天義塾」を開く。外部との接触を避け、塾内で中学校入学レベルの日本語を教えた[(9)]。1928年11月には場所を東京目黒に移し、笹目は新たな学生寮に「神殿」を設けて「大本皇大神」の神霊を祀り、毎朝の勧行を怠ることはなかった[(10)]。同年にはさらにモンゴル人少年4人を受け入れ[(11)]、事業は順調に展

開しつつあった。

大本教の熱心な「信者」であった笹目が、モンゴル人学生にどのような教育を施していたのか定かでない。ただ、笹目の自叙伝によれば、モンゴル青年教育は精神教育に重点をおき、その基本に「チンギス・ハーン精神」をあげている。チンギス・ハーンに学ぶべき点は、全モンゴル民族統一の理想が実現したとき、さらに天下一家の和合統一を心に描いたことにある。そして今日、新たな精神運動が生まれたとき、天下一家の実現がなるのであり、モンゴルはそのとき乗ずるべき体制を築いておく必要から、民族の団結精神を涵養することが先決だ、とも語っている[(12)]。チンギス・ハーンの事跡に民族を超えた世界調和の理想を見出し、将来における世界の精神的統一と、その理想世界へ合流する第一歩としてモンゴルの民族統一を説く笹目に、王仁三郎と相似した思考を見出せる。

宗教上の信念に発した王仁三郎の「入蒙」が、結果として日本の大陸侵略を先取りしたかたちとなったように、笹目のモンゴル人留学事業もまた満鉄や日本陸軍から注目され、援助を受けるようになっていった[(13)]。ところが、しばらくして笹目は、関係者に種々の「術策」を弄したということで信用を失ったようだ。援助を打切られた戴天義塾の経営は、1930年夏ごろ窮地に陥り、ついに笹目は陸軍の斡旋で留学事業から完全に手を引き、代わって修養団後援会幹事長の瓜生喜三郎に委ねられることになった。瓜生は麻布笄町の自邸にモンゴル人学生9人を収容し、これを「経国学園」と名付けた。

1931年1月18日の開園式には学園顧問の白川義則大将、建川美次少将、学園理事の白土千秋、座間止水も出席した。このときモンゴル人学生らは、「明い東瀛に組立てられる我が学園の成立を迎へて」と題するパンフレットを「蒙古留日学生会」の名で作成し、出席者に配布している。そのなかで彼らは次のように述べていた。すなわち、チンギス・ハーンの覇業によって全アジアを統一し、欧州にまで進出した我が大モンゴル国もここ数百年は清朝の支配に気息奄々とするばかり、最近の「変象的な侵略主義たる三民主義」やロシアの「赤化」活動はモンゴル民族を滅亡させるものである。だが、我らモンゴル民族は祖先の残した偉業とその固有文化を戴きながら独立運動を覚悟し、日本もモンゴルの「革命」に同情してくれる以上は、モンゴル民族が「支那」に同化されることは決してなく、独立できる日を確信している、と[(14)]。蒙古留日学生会は「革命」の成功、「モンゴル独立」を確信していた。それを支えていたのは、「民族固有の文化」に対する自信である。「民族固有の文化」を象徴するもの、それがチンギス・ハーンと彼の覇業であった。ゆえに、モンゴル文化の「復興」こそが「革命」成就の第一歩であった。

さて、モンゴル留日学生はチンギス・ハーンをモンゴル文化の象徴とみたのであるが、それを大本教や笹目の影響だけに帰すことはできない。凝集シンボルにチンギス・ハーン

を立てるという発想自体、すでに北平のモンゴル青年のあいだにあった。北平蒙蔵学校の「チンギス・ハーン紀念大会」がそれである。そもそも、内モンゴルのオルドスにはチンギス・ハーンの祭殿である「八白宮（八つの白い天幕）」があり、清朝以前から祭祀がつづいていた。八白宮の祭祀のなかでも盛大かつ重要なのが陰暦3月21日の春季大祭である。北平蒙蔵学校のモンゴル学生や蒙古留平学生会のメンバーは、民族の精神的一体化、「チンギス・ハーンの精神」「民族固有の精神」を喚起する目的で、白八宮の春季大祭にあわせて毎年陰暦3月21日に北平蒙蔵学校で「チンギス・ハーン紀念大会」を開催したのである[(15)]。ちなみに蒙古留平学生会とは、北平在留のモンゴル青年が中心となって1926年に結成され、「モンゴル文化の促進、友誼の増進、意見の相互交換」を掲げた学生組織であった。

ところで、前述の蒙古留日学生会は、「蒙古革命」を宣伝する目的で1930年春に結成された。会員は経国学園の学生9名のほか、ジルガラン（徳古来：長崎高商）、ミンガニバヤル（韓鳳林：陸士）、アーチンガ（包国樑：大阪高工卒）、オユンダライ（呉廣義：早稲田大学）の計13名からなり、顧問に東京外国語学校日本語教師の施祥廷をおいた。1930年夏からは機関紙『祖国』も発行している。同誌は蒙古留平学生会の機関誌『蒙古』と「兄弟の間柄」であるといい、留平学生会や同郷人などにも配布していた。

では、蒙古留日学生会が目指す「蒙古革命」とは何か。『祖国』第2集（1931年1月1日発行）の日本語抄訳によれば、民族革命と社会革命の一体であり、経済的搾取と帝国主義の打倒が目標だという。モンゴル内部の「致命傷」として政治的支配と経済的搾取をおこなう王公・喇嘛の打倒を訴えた。また、帝国主義は必ず武力を以て弱小民族を消滅しようとするから、これに対抗するため、当然我々としても武装の準備をする必要がある、とも述べていた[(16)]。

1931年9月18日、満洲事変が勃発するや、これを内モンゴル独立の好機とみた中国内外のモンゴル青年たちは陸続と奉天に集結した。日本からも蒙古留日学生会の徳古来、包海明、アルタンサン、チョクバートル、チョロバートルら8名が急遽帰国して加わり[(17)]、先に帰国していた韓鳳林もこれに合流した。彼らは陸軍士官学校の留日経験を持つガンジュールジャブの下で「内蒙古独立軍」を結成して行動を開始する。その結成式典は鄭家屯の南、大窩子屯の小高い丘で行われた。独立軍と各部隊の旗が掲げられた広場の中央にはチンギス・ハーンの肖像が飾られ、祭壇には様々な供物が並べられた。総司令官ガンジュールジャブが大願成就を祈願した後、兵士一同は拳銃右手に差しあげて「ヤバー（前進）！ヤバー、ヤバー」の大音声を上げて士気を高めた、という[(18)]。これまでの経緯をみれば、彼らがチンギス・ハーンをシンボルに掲げ、内モンゴルの独立を目指すことになっ

たのは当然の帰結であろう。

関東軍の支援を受けた内蒙古独立軍は1931年10月13日、通遼を攻撃するが中国軍の抵抗にあって敗走、戦力不足が明らかとなって一時解散を余儀なくされた[19]。この間にも、関東軍はモンゴル各方面の有力者と連絡を取りつつ、内モンゴルへの対処方針を徐々に「自治区域」の設定へと収斂していった。内蒙古独立軍はその後、内蒙古自治軍と改称されるが、目立った戦果をあげないまま興安南警備軍に再編される。だが、独立軍に参加したモンゴル留日学生の多くは、「満洲国」や「蒙疆政権」で官吏・軍人として重要な地位を占めていくことになる。

ところで、関東軍の対内モンゴル政策がその輪郭を現し始めるのは、1932年2月2日策定の「満蒙建設に伴ふ蒙古問題処理要綱[20]」あたりからである。この「要綱」は、「蒙古人の為に特定の一省を設定して牧畜経済を主体とせる自治を行はしめ」ることを方針に掲げるが、その「自治省」の名称は、「蒙古省の如き民族意識を蘇生せざる」ために「興安省」とすることを定めていた。「蒙古」という民族アイデンティティを削いだ上での「自治」であった。当然、モンゴル人の民族意識を刺激するようなチンギス・ハーンについての言及は見られない。宗教については、「信教は自由」を基調に「喇嘛教を存続するも漸を逐て改善せしむ」とされた。

ちなみに「満洲国」の宗教政策を一瞥すれば、「対満蒙方策[21]」には「王道主義民族協和の建国精神、日満融和の観念を普及徹底し日本文化の注入を策せしめ……宗教は自由ならしむるも邪教の粛清を期す」とあり、「宗教の自由」を容認する方針が打ち出されていた。この方針の下、「王道主義」「民族協和」の統治理念を民衆に浸透させる役割を担ったのが、紅卍字会や万国道徳会といった宗教・教化団体であった。いずれの団体も、世界に共通する「人類愛」を根本として儒仏道耶回の五教合一を説いた。ちなみに、紅卍字会は大本教の王仁三郎との関係も強く、教化宣教にも協力している[22]。混交的宗教観は満洲国協和会にも見出せる。たとえば、本部の協和会館には祭壇が設けられ、天照大神のほか釈迦、孔子、マホメット、キリストを合祀し、お互いに礼拝し合うことによって「民族協和」の率先躬行を顕現した、という[23]。

このような五教合一的、混交的な信仰へ向かう民間宗教を否定し、伝統学術としての儒教を再興しようとしたのが国務総理の鄭孝胥であった。孔学会の会長でもあった鄭孝胥は、1933年の春丁祀孔で首都新京の文廟に欽派され、秋丁祀孔には執政溥儀が親祭した。こうした「満洲国」の国家祭祀は「王道主義」という統治理念を可視化したものであり、それは事実上、儒教の「国教」化を意味していた。このように「宗教（信教）の自由」と「国教」の確立というアンビヴァレンスな近代的価値観を止揚するため、祭祀と宗教を分離し

て「国家祭祀」に「国教」としての特権的地位を確保しようとする手法は、「満洲国」のみならず、日本や袁世凱政権にも共通するものであった。その背後には、国民国家の形成に宗教的統一、「国教」を立てることが不可欠だという認識が強くはたらいていた。

類似した認識は、対モンゴル工作にかかわった日本人にも見られる。「満洲国」を樹立した関東軍は隣接地域の安定をはかるため、内モンゴル西部に進出していった。いわゆる「内蒙工作」である。このとき多倫特務機関長の松室孝良は、「蒙古国建設に関する意見[24]」（1933年10月）をまとめ、宗教政策について「喇嘛教を国教とし、国家より適当の保護を加ふる」と提案した。また、「満洲国隣接地方占領地統治案[25]」（1934年2月）でも、「蒙古人は喇嘛教に心酔しある現状に鑑み、喇嘛教を国教とするも政教の分離を確立し、僧侶の政治に対する干渉を禁ず」との方針を示している。「蒙古国」の「国教」にチベット仏教を立てんとする松室の着想そのものは、清朝のモンゴル政策から導き出されてきたものであるが、「国教」や「政教の分離」といった語り方は、やはり近代の産物である。「国家と祭祀・宗教」といった問題認識が、日本の内モンゴル侵略にも付随していたことを確認しておきたい。

Ⅱ 「チンギス・ハーン神社」と国家祭祀

1935年8月18日付の『満洲日日新聞』は、蒙政部大臣を会長とする「蒙古文化促進協会」の創設が「満洲国」蒙政部で具体化しつつあり、去る8月16日に開かれた協議会の結果、いよいよ本月中に設立される見込みだ、と伝える。記事はさらに続けて、モンゴル文化の向上と科学技術の普及を目的とする「促進協会」が、「新京」に「成吉斯汗神社を建立して民族帰依標たらしめ各地に又分社建立を慫慂して成吉斯汗神社による民族の団結を計らんとする計画もあり」という。ここに「成吉斯汗（チンギス・ハーン）神社」の構想が突如として浮上した。

記事にある蒙政部（大臣・チメドサムピル、次長・依田四郎）は、それまでの興安総署を廃止し、1934年12月に新設された対モンゴル行政機関である。「満洲国」の対モンゴル政策を改める必要性については、つとに1933年7月起案の関東軍参謀部「暫行蒙古人指導方針要綱案[26]」あたりでも強調されていた。熱河作戦終了後、「満洲国」の国境安定をはかる関東軍は、内モンゴル西部や外モンゴルのモンゴル人を「親満親日に転向」させるため、「満洲国」の対モンゴル政策を「民族協和の精神に基き其の本然の発展を遂げしむる」ことに転換したのだった。ただし、この「要綱案」は「チンギス・ハーン神社」について何ら言及していない。

「チンギス・ハーン神社」の構想が浮上した経緯について、興安総署次長の任にあった菊竹實蔵は、その自著『経蒙談義[27]』のなかで次のように説明している。すなわち、興安総署を廃止して蒙政部を新設し、対モンゴル政策が「純粋なる属人主義」に転換した結果、モンゴル人の「民族的自我」が膨張発達して「蒙古」を冠した機関や団体（蒙古会館、蒙古研究会、蒙民更生会など）が続出し、その果てに「ジンギスカヌ神社」まで出てきた、と。菊竹の説明では、「チンギス・ハーン神社」の構想がモンゴル人からの発意だったことが知れる。

ふり返れば、チンギス・ハーンのモニュメントを建てるという構想自体は、すでに1930年ごろ北平のモンゴル青年から出されていた。北平蒙蔵学校で「チンギス・ハーン紀念大会」が始められたころ、蒙古留平学生会は、「適当な地にチンギス・ハーンの銅像を鋳造して先賢の功を彰かにし、民衆の愛族の志を励ます[28]」ことを提案していた。記念・顕彰の一様式として西洋にはじまった銅像が中国にもたらされたのは清末の上海、李鴻章の銅像が建立されたあたりを嚆矢とする[29]。中華民国以後、とくに国民政府において孫文の銅像が各地に建立されたことは既知に属する。蒙古留平学生会が提案したチンギス・ハーンの銅像もこうした時流に乗ったものであろうが、このあと実際に銅像が建立された形跡はない。1933年に始まる内蒙古自治運動でも、チンギス・ハーンの顕彰は肖像画を利用するにとどまっている。ともあれ、「満洲国」で突如浮上した「チンギス・ハーン神社」の構想は、銅像や肖像画による記念・顕彰とは大きく性格を異にするといえよう。

ふたたび菊竹の『経蒙談義』にもどれば、興安軍官学校では岳飛よりもチンギス・ハーンを「武神」として祀るべきだという説が起こったという。それは「満洲国」が孔子と岳飛を「文武の神」として祀り、国家祭祀に孔子祭を設けているからで、マジョリティである漢族を主体に思いついた「誤謬」だと批判する[30]。菊竹は、民族意識の公然たる露出が憚られるようになった対モンゴル政策の転換にのみ異を唱えたわけでなく、「満洲国」の国家祭祀そのものに疑問を呈していたのである。

儒教が「満洲国」で「国教」に等しい地位を与えられていたことは既に述べたが、ほかにも「満洲国」軍政部や各軍管区司令部は、関羽と岳飛を「軍神」として祀る春秋2回（陰暦2月上戊と陰暦8月上戊）の祀関岳を執りおこない、この日を「国家」の祝祭日としていた。ところがそれが、菊竹の説明にもあるように、モンゴル人たちのチンギス・ハーン崇敬熱を一層刺激することになったのである。1936年3月に開かれた興安各省長会議では、モンゴル人省長からチンギス・ハーン祭祀を「国家祭祀」とする要求が出される。その理由はまさに、「満洲国」が「文教の功首たる孔子」を祀りながら「武功の烈たる成吉思汗」を祀らないのは、モンゴル人の満足するところではない、というものであった[31]。祭祀

と宗教を分離することで儒教を宗教一般から超越する特権的存在に位置づけようとした手法が、かえってモンゴル人にも連鎖し、チンギス・ハーンの「国家祭祀」を要求するというかたちでモンゴル人は民族主義を主張したのであった。モンゴル人たちがチンギス・ハーンのモニュメントを「神社」と表現したのも、日本の「国家祭祀」が念頭にあってのことだろうか。

ここで興安軍官学校についても触れておく。「満洲国」建国後、満洲国軍のなかにモンゴル兵卒からなる興安軍が編制された。そのモンゴル人士官を養成する目的で、1934年7月に鄭家屯（1935年に王爺廟へ移転）で開校したのが興安軍官学校である。同校には「満洲国」内外からモンゴル青年が集められた。その教育内容は精神教育に重点を置いたことが特徴で、「日満親善、民族協和、排共意識、迷信打破」などが教え込まれた[32]。精神教育を重視した軍官学校であれば当然、関羽・岳飛を祀ったことだろう。

では、興安軍官学校のモンゴル学生は、どのような宗教意識を有していたのだろうか。京城帝国大学で宗教学を担当した赤松智城が、1936年9月下旬に興安軍官学校でモンゴル学生（総数178人、平均年齢20.8歳）の宗教意識を調査している[33]。その設問と回答結果は以下のとおり。

まず、「あなたは喇嘛教を信ずるか」の問いに「信ずる」と答えた学生は90人（50.6%）。次に、「あなたは孛額（シャマニズム）を信ずるか」の問いに「信ずる」と答えたのは19人（10.7%）。最後に、「あなたの知っている神名仏名を列記せよ」の問いに140人（78.7%）が62種（回答総数371個、複数回答あり、1人あたり平均2.65個）の神仏名を記した。その上位10種は、①釈尊（回答数60）、②関帝（48）、③観音（34）、④弥勒（25）、⑤母神・仏母（22）、⑥女神・天女（15）、⑦大黒天（14）、⑧娘々（12）、⑨チンギス・ハーン（10）、⑩馬頭観音（8）であった。

以上は植民者である日本人の調査であるから、学生の意識がそのまま反映されたと見なすことはできないが、さすがにチベット仏教の神仏名が目に付く。信仰の有無にかかわらず、仏教が身近な存在であった。そのなかにあって2番目に多く挙げられた関帝は、興安軍官学校でも関岳祭祀が行われていたことの傍証であり、学生の反射的回答とみてよかろう。ちなみに、岳飛の名を記した者はわずか2人。北方異民族と戦って漢族の英雄に祭り上げられた由縁を、モンゴル学生は嫌悪したのだろうか。チンギス・ハーンをあげた者は、回答者140人のうち僅か10人。チンギス・ハーンを「神」としてみることと崇敬対象とすることとは別の範疇に属するが、モンゴル学生のチンギス・ハーンに対する関心は当時まだ低かったとみてよかろう。モンゴル人エリートにとっては、学生の精神世界がチベット仏教と道教に支配されていただけに、チンギス・ハーンを宣揚して民族意識を喚起しなく

てはならない理由がここにあった。

ともあれ、モンゴル人の要求したチンギス・ハーンの国家祭祀化は、「満洲国」の国体論にまで行き着かざるを得ない深い射程をもっていた。国家と「国教」とが一対一で対応している以上、新たな国家祭祀を加えることは「国教」をさらに一つ立てることであり、つまるところ「満洲国」の解体、モンゴルの独立を意味するからである。おりしも1935年春には、興安北省長の凌陞がソ連やモンゴル人民共和国と通謀して内外モンゴルの独立をはかった嫌疑で逮捕・処刑されるという、いわゆる「凌陞事件」が起きていた。かかる状況に「満洲国」政府は1936年5月20日、「蒙古民族指導の根本方針」を策定し、「国内蒙古民族の離満解体運動は之を許さず」としてモンゴル人の民族主義を抑え込むことを確認した[34]。さらに、1937年7月には蒙政部を廃止し、モンゴル行政機構の権限を縮小して興安局を新設した。「チンギス・ハーン神社」の構想もここに一頓挫する。

さて「内蒙工作」を進めていた関東軍は、内蒙古自治運動の中心的人物であったシリンゴル盟スニト右翼旗ジャサクの徳王に接近し、1936年5月に「蒙古軍政府」を樹立するに至る。翌年7月に盧溝橋事件が勃発すると、関東軍は察哈爾作戦を発動して平綏線沿線に進撃した。徳王のモンゴル軍も関東軍と共同作戦をとり、綏遠省の省都、帰綏の攻略を目指して進撃を開始した。

帰綏占領を目前にした1937年10月8日、徳王は日本人記者の取材に応じ、「自分は明治大帝の御懿徳を敬慕申上げている、願わくは明治大帝の御偉業に倣(ママ)つてここに更生蒙古の創造に努めて行きたい、成吉思汗については蒙古民族は尊崇して措かざる神である何れ適当な場所を選定し神社を祀りたい[35]」と意気込みを語った。徳王までもが「チンギス・ハーン神社」に言及していたことは興味深い。この後、平綏線沿線を占領した関東軍は、10月27日に厚和（帰綏を改称）で「蒙古聯盟自治政府」、いわゆる「蒙疆政権」を樹立したが、日本敗戦までオルドスを支配下におくことはついになかった。だが、徳王が取材に応えていた時には、オルドスの帰趨も八白宮の行方も不透明であった。その時点で徳王はすでに、八白宮とは別の祭祀施設を創建する考えを持っていたのである。徳王は明治天皇にも触れていることから、明治天皇陵の「代替物」であった明治神宮を参考に、八白宮の代替物として「チンギス・ハーン神社」を案出したのだろうか。ともあれ、「蒙疆政権」の樹立以前から、徳王の心中には八白宮とは別にチンギス・ハーンの祭祀施設を創建する考えがあったことに注目しておきたい。

ところで、いま一度「神社」という二字にこだわってみると、日本側の思惑も見えてくる。神道家の小笠原省三は、華北にある神社の視察・指導を外務省の嘱託として命じられ、1939年夏に「蒙疆政権」を訪れて徳王と会談している。このとき小笠原は、「ラマ教」の

弊害からモンゴルを救済するため、チンギス・ハーンを祀る神社を建立するべきで、張家口神社の祭神にチンギス・ハーンを加えるよう進言した。さらに彼は駐蒙軍参謀長の田中新一を訪ね、ここでも「チンギス・ハーン神社」の持論を展開したが、結局それは聞き入れられなかったという[36]。この一件は、いわゆる「朝鮮神宮祭神論争[37]」を彷彿とさせる。そもそも小笠原は、海外の神社にはその土地の「始祖および建国功労者」を祀るべきとする神道観を持っていた。そのため、朝鮮神宮に檀君を祀るよう主張した小笠原は、「蒙疆政権」にあってはチンギス・ハーンを祭神に祀るべきだと考えたのだった。

その後、「満洲国」や華北の日本占領地では、1940年の皇紀二千六百年の慶祝前後から「国家神道」の強制が加速してくる。「満洲国」では1940年7月に溥儀が「国本奠定詔書」を発布し、「建国神廟を立て、天照大神を奉祀し……国本、惟神の道に奠まり」と宣言した。9月には各民族の信仰の中心として、天照大神を祀る建国神廟とその摂廟たる建国忠霊廟が創建され、皇帝溥儀が祭主となって鎮座祭を執行した。これらは伊勢神宮と靖国神社に倣ったものであったが、「惟神の道（国家神道）」が事実上、儒教に代わって「満洲国」の「国教」となったことを意味した。春秋祀関岳の休日が廃止され、新たに「建国神廟創建記念」と「春秋建国忠霊祭」が休日とされた。興安軍官学校でも「元神殿遥拝所」が設けられ、モンゴル人学生が毎朝参拝するようになった[38]。

一方、「蒙疆政権」でも1941年9月、「蒙疆総鎮守」の蒙疆神社が張家口に創建され、その祭神が天照大神、明治天皇、国魂神、北白川宮永久王（1940年9月張家口で事故死）の四柱に決まる。それを聞いた小笠原省三は、日本の外務大臣に意見書を提出し、蒙疆神社にチンギス・ハーンを祀ることが、「蒙古民族を『ラマ教』より救出し、日蒙一体の特殊地域を強化する政策的見地よりするも極めて重要なる[39]」と主張した。小笠原の提言は、モンゴル人に日本との精神的一体化を強要する独善的な発想であり、仮にチンギス・ハーンが祀られたとしても、日本が一方的に持ち込んできた神社を徳王らが崇敬したと思えないが[40]、モンゴル人に「国家神道」を普及徹底させるにあたり、チンギス・ハーン崇拝が看過できないことを日本側に認識させたに違いない。

事実、神道とチベット仏教との接合にチンギス・ハーン崇敬を利用しようとする議論が、磐井文雄（蒙古軍顧問）など「蒙古通」と呼ばれた日本人のあいだに起こる。1942年、厚和在住の日系軍人・官吏からなる厚和蒙古研究会は、「蒙古の復興建設」を主眼に『興蒙推進要綱』をまとめた。「ラマ教の弊害」を問題視する彼らは、民族精神の涵養が「モンゴル復興」に重要と考え、「蒙古民族の信仰特性に成吉思汗に於て昂揚せられたる天の信仰を強調しラマ教信仰を之に順応せしむ」ことを説き、さらに「蒙古民族の天への信仰、及び同じく辺疆種族たる回教徒のアラーへの信仰は、指導者たる日本の天御中主神を中心

とする神への信仰に帰一」させることを提唱したのであった[41]。天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）は神道説で宇宙万物の主宰神とされる。つまり、磐井たちの意図は「天の信仰」、すなわち遊牧民族のテングリ信仰を媒介に、チベット仏教を日本の「国家神道」を頂点とする序列・秩序のなかに組み入れようとするものであった。そのテングリ信仰を喚起するために持ち出したのが、チンギス・ハーンであった。それぞれの「天」が意味するところを考慮せず、モンゴル人の「天の信仰」も、ムスリムの「アラーへの信仰」も、神道と同質にみなす磐井たちの考えはあまりにも荒っぽい議論であり、「蒙古通」と呼ばれた専門家たちの限界をうかがうことができる。

また、より深刻な問題を含んでいると思われるのは、磐井たちがアメノミナカヌシノカミを持ち出してモンゴル人の信仰を「国家神道」に包摂しようと考えたことだ。幕末維新期の神道思想の展開をふり返れば、宇宙の主宰神であるアメノミナカヌシに強い関心を向けたのは、霊魂の行方や幽冥界といった宗教色の濃い神道説をつくりあげた平田篤胤であった。それが維新後、明治政府では皇祖神アマテラスとの関わりで天皇統治に力点をおく津和野派国学が影響力を持つようになり、平田派が後退する経緯があった[42]。それ以後、日本では皇祖神アマテラスを国体論の中心に据えて天皇の名による政治支配を正当化してきたことをふまえれば、アメノミナカヌシを強調する磐井たちの議論は、天皇制国家の秩序原理を切り崩すものであった。そのことは、おなじように平田派国学の神道説にそって教説をつくり上げた出口王仁三郎が[43]、不敬罪で弾圧されたことからも明らかだろう。モンゴル人の信仰を「国家神道」に接合しようとすれば、問題はモンゴル支配だけにとどまらず、はね返って日本の国体論をも切り崩しかねない重要な問題をはらんでいた。

ただ、「蒙古通」と呼ばれた日本人のすべてが、チンギス・ハーンの祭祀に積極的だったわけではない。例えば前出の菊竹實蔵は、モンゴル人がこぞってチンギス・ハーンを祀ることに反対だった。すなわち、チンギス・ハーンをその宗族である特権階級が「骨脈的祖先」として祀ることに異論はないが、モンゴルの「民族主神」とすることには反対である。なぜなら、チンギス・ハーンはスネス（魂）であり、シャマニズムの信仰対象となるテングリ（天）でも、オンゴット（精霊）でもないからだ。したがって、「満洲国」における「民族的景仰」は只一系、「満洲国」皇帝を通して建国神廟に参詣し、「東の方日の出づる所」に帰するべきである、と述べていた[44]。日本への帰一は措くとして、モンゴルの精神世界にかんする菊竹の理解は、オーソドックスなもので今日のモンゴル研究からみても妥当なものであろう。

だが、徳王がチンギス・ハーンを「神」と形容した前述の例もあるように、モンゴル人のなかにもチンギス・ハーンを「神」として積極的に位置づけ直そうとする動きがあった

ことに注意しておきたい。例えば、「蒙古青年結盟党」のチンギス・ハーン像がそれである。「蒙古青年結盟党」は1940年頃、元留日学生のデリゲルチョクト、哈爾浜学院教師のドルジ、青旗報社のダンザンらを中心メンバーに「モンゴル復興」「大モンゴル国建設」のスローガンを掲げて結成した非合法の青年組織である。その「組織大綱」に、「我等の元祖『成吉斯汗』を党神と仰ぎ、党員は皆信仰し、武威を隆盛ならしむべし」との条文を立てたのである。ほかにも「組織大綱」には、「本党に加入するを得る者は、蒙古に熱誠忠実なる真の蒙古人のみ」「蒙古の天性を喪失せる曖昧なる蒙古人の加入を許さず」「蒙古民族のみの独立国家を建設す」「聖戦成吉斯汗の偉大なる目的を継承し、五色四外国を再び占領し、世界を平和ならしめ、大蒙古の基礎を堅固ならしむ」といったラディカルな条文が盛り込まれていた。このような条文を掲げた背景には、現在のモンゴルは四周各国の圧迫によって全く衰微し、特に内モンゴルは「日本の帝国侵略主義勢力下」にあり、一部は「満洲国」に併合され、「蒙疆政権」も「実権は日本人に専掌せられ全面的に傀儡化」されているとの切迫した危機感があった。故に、モンゴル復興には外部からの「圧迫及精神主義」を打倒して「民衆精神を統一」することが不可欠だと考えたのである[(45)]。「民族精神」＝「武威」を取りもどすため、信仰対象の「神」としてチンギス・ハーンを宗教的存在に昇華し、これへの絶対的帰依を求めようとしたものと推測される。

Ⅲ　成吉思汗廟の造営

日中戦争が長期化するなか、日本側はモンゴル人を引きつけておくため、対モンゴル政策のテコ入れを始めた。「満洲国」では1940年から「興安振興3カ年計画」が始まり、経済、衛生、文教など広範な「振興策」に取りかかった。他方、「蒙疆政権」でも1941年あたりから、「蒙古自治邦」への政権名改称、最高顧問の更迭・廃止など形式的にはモンゴル側に妥協的な政策へと路線を変更しつつあった。

こうしたなか、1942年3月3日付の『盛京時報（晩刊）』紙上に「成吉思汗廟の創建を決定」との見出しが掲げられた。記事によれば、王爺廟北郊外の汗阿吉拉山に「成吉思汗廟」を創建して伝統祀典・祖先追慕の誠を継続ならしめること、すでに「奉建委員会」が結成されて発起人のバトマラプタン（興安局総裁）が委員長に就いたこと、本年4月1日に着工して1943年9月末に竣工予定であること、工費100万円をモンゴル王公はじめ官民が負担すること、完成後は喇嘛僧が祭司となって毎年陰暦3月21日に例祭を挙行することが報じられた。この報道前後に、成吉思汗廟のことは全く公表されていない。突如決定された感がある。

のちに王爺廟特務機関員の篠田謙一は、モンゴル留日学生との座談会で、成吉思汗廟の創建を決定した経緯を次のように説明している。すなわち、独ソ戦が勃発した際、モンゴル地域での蒙系の指揮統一の不備が問題になった。このときモンゴル側代表は民族の精神的基礎にしようと成吉思汗廟の創建を提案し、王爺廟特務機関長の金川耕作と協議した。その結果、金川の賛意を得ることができ、政府中央や関東軍と交渉して建設資材が引き渡された。廟の創建は日本人有識者がモンゴル人の統一をはかるために案出したものだ、と[46]。これによれば、成吉思汗廟の創建を日本側に踏み切らせたのは、独ソ戦の勃発だった。それまで日本側は、モンゴル地域を「満洲国」と「蒙疆政権」に分断統治し、内モンゴル統合をのぞむ徳王の要求も退けてきた。ところが1941年6月に始まった独ソ戦は、ソ連を三国同盟に引き込むことを考えていた日本にとって予想外の出来事であり、ソ連や外モンゴルと国境を接する「満洲国」と「蒙疆政権」の連携･防衛強化が緊要となった結果、成吉思汗廟の創建が決まった。

また、菊竹實蔵の創刊にかかるモンゴル語新聞『青旗』（1942年5月9日付）には次のような記事もある。日本側の了解を得て「成吉思汗廟奉建委員会」が王爺廟に設置されたのは、1941年12月のこと。会長にバトマラプタン、副会長にガンジュールジャブ（興安軍官学校校長）とマニバタラ（蒙民更生会専務理事）が就任した。年が明けて1942年5月5日、成吉思汗廟の創建予定地、すなわち汗山にボヤンマンダホ（興安南省長）、マニバタラはじめ政軍の関係者多数が参集した。この日はチンギス・ハーン大祭日の陰暦3月21日にあたり、参集者はチンギス･ハーンの祭祀を執りおこない、あわせて「地鎮祭」を行った、と[47]。さきの『盛京時報』は4月1日を着工予定日だと伝えていたが、これによって成吉思汗廟の着工日は1942年5月5日と確定してよかろう。かくして、成吉思汗廟を創建することの本質的意味が十分に問われないまま、国際政治の急変に迫られて建立することになった。

「蒙疆政権」も直ちに動いた。「蒙疆政権」も1942年5月5日に「チンギス・ハーン大祭」を執り行った直後、5月11、12日の両日、興蒙委員会の第2回定例会議を開いた。興蒙委員会は「モンゴル復興」を主眼に「三大施政方針（経済の確立、教育の普及徹底、民族の更生）」を掲げ、前年6月の政府機構改革で設置された対モンゴル行政機関であった。定例会議には政府要人、興蒙委員会委員、各盟長のほか、「満洲国」から興安局参与官河内由蔵、同参事官オユンダライも出席しており、「満洲国」との連携がうかがえる。会議二日目､副委員長ムグデンボー（チャハル盟鑲黄旗総管）は「『疆民』が虔誠崇拝の念を深め、倍仰（ママ）を厚くする見地から、1940年8月の蒙古会議を受けて迅速に成吉思汗廟を創建し、英霊を慰めると同時にその偉業を昭示発揚する」と述べ、成吉思汗廟の創建を提案した。こ

の提案は満場一致で通過、「成吉思汗廟奉建委員会」を新設し、創建場所や経費などを検討することが決まった[48]。「満洲国」の「奉建委員会」と「蒙疆政権」のそれとの関係は判然としないが、「蒙疆政権」では1940年頃から成吉思汗廟の創建が議論されていたようだ。

その後も「蒙疆政権」の対応は早かった。興蒙委員会は「蒙旗建設要綱」を策定し、3期10カ年計画で蒙旗行政の刷新に乗り出した。計画初年の1942年度は、施策対象をシリンゴル盟スニト右翼旗、チャハル盟鑲黄旗、ウランチャブ盟四子王旗の3カ所に絞り、「蒙旗建設隊」を派遣して蒙旗下部機構（佐領）の整備（模範村と中心村の建設）に取り組むこととした。建設隊が到着した鑲黄旗では、7月21日に佐領会議が開かれた。このとき各佐代表から模範村にチンギス・ハーン廟を創建する意見が出され、即時決議された。あわせて廟建設のため、各佐から総額1000円の醵金もあった。ムグデンボー以下、鑲黄旗モンゴル人士の熱意がうかがわれる。「蒙旗建設要綱」に成吉思汗廟の計画はなかったが、興蒙委員会は佐領会議の決議を受け、民族精神を高揚する見地から急遽、3000円の予算を組み、他に先駆けて鑲黄旗での廟創建を決定した[49]。このあと政府は、将来各旗でもつくられるだろう成吉思汗廟の様式を統一する必要から、一度政府で鑲黄旗の設計案を検討し、様式が決定され次第、鑲黄旗での造営に取りかかることとした[50]。成吉思汗廟を各地におくという構想は、前述の1935年に「満洲国」が発表した「チンギス･ハーン神社」の計画にある「分社」を想起させる。だがその後、「蒙疆政権」が様式を決定した様子はなく、鑲黄旗での造営も立ち消えとなったようだ。

なぜ造営が中断したのか、その原因は定かでないが、その様式に注目してみると、このとき鑲黄旗で計画された案は、模範村中央の公共広場（8000平方メートル）に廟を造営し、その周囲に環状道路と植樹をめぐらせて「神域の風雅」を漂わせるというものであった[51]。街の中央にロータリー広場を設け、そこから放射状に幹線道路を配するという都市設計、いわゆるバロック的都市デザインは、ナポレオン3世のパリ大改造あたりを嚆矢に世界各地に広がり、「満洲国」新京の大同広場もそのひとつだった。パリの凱旋門の例をあげるまでもなく、ロータリー広場に銅像や記念塔などモニュメントを配置するスタイルもまた普遍的に見られたが（ちなみに大同広場には水準原点を設置）、「祭祀･宗教施設」である成吉思汗廟を直截的に広場中央に配する構想は特異といわねばならない。

かかる設計をモンゴル人はどこから着想したのだろうか。それは南京国民政府の都市計画だったと思われる。すなわち、全国統一を成し遂げた南京国民政府は、1920年代末から30年代初頭、南京や上海で大規模な都市改造に取りかかった。「南京首都計画」と「大上海都市計画」は、ともにバロック的都市構造を基本設計に、都市中心区域に「宮殿式」

とよばれる中国風の官庁建築を配するものであった。その放射状に走らせた道路網の都市中心に配置したものが、中山紀念堂であった[52]。孫文学説の実践を統治の正統性に掲げる国民政府は、都市中心に中山紀念堂を置くことで、その求心性を空間的に表現したのである。おなじく国民政府の孫文尊崇儀礼であった「総理紀念週」に範をとり、「蒙疆政権」では「チンギス・ハーン紀念週」が制定された[53]ことを考え合わせるならば、チンギス・ハーンの祭祀儀礼を創出するに際し、モンゴル人エリートが孫文の尊崇儀礼を参考にしていたことは疑いない。孫文への尊崇が「偉大なる教主を祭るという意味で、一種の宗教色さえ帯びた[54]」ものだったとすれば、それは孫文学説が国民政府の「国教」に等しい地位を与えられていたことを意味する。チンギス・ハーンを凝集シンボルに立てようとするモンゴル人エリートにとって、直接・間接に経験したことのある国民政府の孫文尊崇儀礼は、身近な参照モデルであったのだろう。それだけに鑲黄旗の成吉思汗廟の設計は、日本側には看過できないものでもあった。

鑲黄旗での成吉思汗廟の設計が外来の影響を受けていたことは、モンゴルの伝統的な空間秩序からみても明らかである。1941年1月、「蒙疆政権」は徳王の希望を受けてスニト右翼旗に「女子家政学校」を開校した。留日経験者を教師に迎え、モンゴル語や日本語、数学、地歴、のみならず、畜産技術や裁縫・手芸を教授したことにこの学校の特徴があった[55]。教室や宿舎にすべて「ゲル」とよばれる円形のテント式住居を使用したが、その教室内部の西北方向に安置されたのがチンギス・ハーンの肖像であった[56]。戸口を必ず南に向けるゲルの空間秩序にあってモンゴル人は西北方向を「ホイモル」とよび、ここを「聖なる方向」と認識して仏壇を構えるのが慣わしである。チンギス・ハーンを凝集シンボルに立てようとする知識エリートたちは、こうした伝統的な空間秩序にしたがいつつも、本来仏壇を構える位置にチンギス・ハーンの肖像を置くことで、モンゴル民衆をチベット仏教からチンギス・ハーン崇敬へと誘導したのであった。

伝統的な空間秩序が重視されたことは、「蒙疆政権」における「スルデ奉安殿」の安置についても言える。チンギス・ハーンの祭殿である八白宮とチンギス・ハーンの聖鉾スルデは、「蒙疆政権」に奪われることを恐れた国民政府によって1939年6月、オルドスから甘粛省に移された。これに動揺するオルドスの人心を引きつけようと、「蒙疆政権」はスルデを作製して1942年11月23日、大樹湾で太祖スルデ奉祀祭を執り行った。さらに「蒙疆政権」は、二万円の費用を投じて「スルデ奉安殿」と「チンギス・ハーン宮殿（オルド）」を作製することにした。政府は安置場所に包頭を考えていたが、チンギス・ハーンの遺嘱に「スルデは黄河を渡ることを得ず」とあることから、黄河南岸のダラト旗大樹湾に安置することになった。このとき重視されたのが、やはり西北の方角であった。大樹湾城内の

西北隅の一角を「聖域」と定め、ここに祭殿を安置した[57]。ここまで見てくれば、鑲黄旗で成吉思汗廟を街の中心に置こうとしたことが、特異な発想であったことが分かるだろう。

ところで1943年4月25日、スルデ大祭がチンギス・ハーン大祭とあわせて大樹湾で執り行われた。政務院長呉鶴齢、総務庁次長ジルガラン、興蒙委員会委員長松王はじめ参加者200余人という盛会であった[58]。祭場は向かって右側にスルデ奉安殿、左側にオルドを配し、オルド内には巻物類や「遺品の刀剣」を安置、その外には黄金の鞍を頂いた白馬と弓箭を据えてあり[59]、オルドが八白宮を再現したものであったことが分かる。これにより、「蒙疆政権」には「八白宮」、「満洲国」には成吉思汗廟が安置されることになる。

さて、話を成吉思汗廟にもどそう。成吉思汗廟創建の決定がモンゴル人のチンギス・ハーン崇敬熱をさらに拡大したであろうことは、『青旗』の記事からも推察される。例えば、1943年5月19日、つまり陰暦4月16日でチンギス・ハーンの「生誕日」とされるこの日、ハイラルの第一国民高等学校では教員の引率で全学生がチンギス・ハーンの祭祀を執り行った[60]。ほかにも、チンギス・ハーン祭祀に参加した喜びを綴った鄭家屯の学生の作文や、1944年春に哈爾浜市の全モンゴル学生がチンギス・ハーン祭祀に参加したことなどが伝えられた[61]。チンギス・ハーン崇敬熱の中心が学生であったことが分かる。

祭祀とあわせて造営費の募集も進められた。例えば、ホルチン右翼中旗では、成吉思汗廟奉建委員会の設置に賛同して旗下の有力者を集めて会議を開き、祖先追憶と献金の気持ちを起こすよう激励した。これに応えて大衆各人は喜び競って金銭を提供し、10日もしないうちに予想を上まわる沢山の寄付金が集まったという[62]。また、興安西省の奉建委員会委員たちが各旗をまわって献金を募った結果、アルホルチン旗16人、ヒシグテン旗9人、バーリン右翼旗33人、バーリン左翼旗11人の計69人から総額15万円の献金があったことも報じられた[63]。さらに1944年5月には「蒙疆政権」から10万円の献金が奉建委員会に提供された[64]。上は政府から下は子供に至るまでモンゴル社会から広範に献金が集められた。

モンゴル青年たちは成吉思汗廟の造営にも「勤労奉仕」で参加した。1943年夏、そして1944年、各地からモンゴル青年男女が集められ、「成吉思汗廟奉建勤労奉仕隊」が結成された。当時ハイラルの看護職員で1944年秋の勤労奉仕隊に参加したツェベクマは、次のように述懐している。彼女は奉仕作業のかたわら、各地から集まったモンゴル青年、とりわけ日本留学生から日本の敗戦が近いこと、内外モンゴルの統一のこと、断固独立すべきことを聞かされ、これ以後「モンゴルはどう生きるべきなのか」「モンゴル民族の独立」といった意識が芽生えてきた、と[65]。

たしかに、成吉思汗廟の造営はモンゴル青少年の民族意識をおおいに喚起したようだ。このころ興安街（1943年に王爺廟を改称）を訪れた日本人は、成吉思汗廟が王爺廟神社よりも一段高い山頂に奉安されることになったのを祖先の偉大さを示すものだと喜ぶモンゴル人の話や、造営中の成吉思汗廟の前を通るとき必ず立ち止まって廟に敬礼する兵士や学生の多いことを見聞している[66]。こうした青少年の反応は、それが素朴な心情から発したものであっただけに、チンギス・ハーンを媒介にモンゴル人の信奉を「惟神の大道」へ導き出そうとする日本側の意図が、廟の完成前からすでに破綻していたことを示している。

Ⅳ　成吉思汗廟と戦時動員

当初の予定から遅れること1年、1944年秋に成吉思汗廟が完成した。その本殿は鉄筋コンクリート造、正面中央に高さ30 mの「円頂方基」の大殿がそびえ、両翼に全長70 mの回廊が延び、その威容を誇った[67]。両翼には小殿を置いて、それぞれを参考室と博物室とし、その室内壁面にチンギス・ハーンの一代記を描いた。

「満洲国」の建設事業を研究した西澤泰彦によれば、実際に成吉思汗廟の設計・施工を担当したのは、「満洲国」建築局の日本人技師たちであった。建築局は前身の営繕需品局の時代から、仮宮廷、建国神廟、建国忠霊廟、新宮廷（未完）など「特殊建築」と称された政治的表現の強い建築物を手がけてきた。成吉思汗廟本殿の意匠を決定するにあたり、建築局の日本人技師たちは明治神宮外苑の聖徳記念絵画館に倣い、関東軍特務部の指示でチベット仏教寺院の建築様式を一部採り入れたのだという[68]。つまり、成吉思汗廟の本殿は、明治神宮とチベット仏教寺院の混交様式であった。なお、聖徳記念絵画館に明治天皇の銅像が安置されることはなかったが、成吉思汗廟の大殿には高さ3 m金色のチンギス・ハーン坐像が安置された。また、モンゴル人の記録では両翼の小殿にフビライ（東側）とティムール（西側）の銅像を配祀する予定であったが実現しなかったという[69]。これなどは、チンギス・ハーンとティムールがセットで語られることが多かった当時の時流をよく表している[70]。

明治神宮と酷似していたのは本殿の意匠だけでない。このとき完成したのは本殿を含む「内苑」だった。「内苑」には正門から本殿に向かう参道の左右に、「神馬厩」「僧房」「塾」「精神道場」などの施設がつくられた。さらに、「内苑」の完成した成吉思汗廟は、続いて「外苑」の造営に取り掛かる予定であった。結局、日本敗戦で「外苑」は未完に終わったが、総工費300万円（内苑175万円、外苑125万円）、敷地面積16万平方メートル（外苑10万

500平方メートル、内苑5万5000平方メートル）という大規模な計画だった[71]。つまり、成吉思汗廟は「内苑」と「外苑」をもつ宗教的モニュメントとして設計されたのである。この内苑・外苑という斬新な構造を初めて採用したのも、また明治神宮であった。成吉思汗廟は聖徳記念絵画館の様式のみならず、明治神宮の内苑・外苑の構造そのものを採り入れていた。

ただし、明治神宮のすべてがそのまま移植されたわけでない。決定的な違いは「内苑」と「外苑」の関係である。神宮外苑の絵画館は、内苑の社殿と一対になって明治神宮をなすが、成吉思汗廟はいわゆる「神社建築」と呼べる社殿を持たなかった。明治神宮外苑にある絵画館の設計を、成吉思汗廟の「内苑」に移植したためである。その点で、成吉思汗廟は明治神宮よりも建築構造的に「格下」の「創建神社」であり、両者のあいだには画然と「序列」が存在した。

だが、成吉思汗廟がもつ神社的性格を、当時のモンゴル人がどれほど認識したであろうか。成吉思汗廟は明治神宮に倣いながらも、「神社建築」の社殿を持たなかったから、およそ「神社」と呼ぶには程遠いものであった。日本の内モンゴル占領以来、チンギス・ハーンの宗教的モニュメントはモンゴルと日本双方の論者から「チンギス・ハーン神社」と称されてきたが、完成して結局「廟」と名付けられたのも、成吉思汗廟の「神社」としての不完全性にあったのだろう。こうした処理のあり方は建国神廟と同様である。しかも、成吉思汗廟はモンゴル語で「チンギス・ハーン・スム」と名付けられた。「寺」や「廟」を意味するモンゴル語の「スム」と称されたことが、成吉思汗廟を伝統的なチベット仏教の寺廟などと一様に捉えさせ、それがもつ日本の精神的・文化的侵略性を覆い隠してしまったのではないだろうか。

さて、成吉思汗廟完成の式典準備は、1944年7月に設置された「成吉思汗廟祭典籌辦局」によって進められた。局長にバトマラプタン、副局長に白濱晴澄、顧問に金川耕作ら3人、参与に高島某（協和会本部副部長）ら8人で構成された[72]。ここに国民教化団体の満洲国協和会が積極的に関与してくる。

成吉思汗廟はその造営を開始して以来、学校での祭祀や寄付金の提供、勤労奉仕など、モンゴル青少年との結びつきが強かった。満洲国協和会はそこに着目したのであった。既にこのとき協和会は、「満洲国」政府が発表した「満洲国基本国策大綱」（1942年12月発表）を受け、「協和会運動基本要綱」（1943年3月8日発表）を決定していた。そこでは「建国精神の顕揚」をあげて「惟神の道を奉戴し、帝旨を遵奉し、国家観念の昂揚を期す」との基本方針が示され、「惟神の道」こそが「建国精神」であることを明確にした。その実践は「建国の淵源、惟神の道に発するを念ひ、崇敬を天照大神に致し、一徳一心以て建国理

想の達成、道義世界の創建に邁進するものとす」と定め、青少年の思想指導に重点を置いた。とりわけ、漢人とモンゴル人に「惟神の道」を信奉させることを課題にあげ、モンゴル人の錬成は「国家意識を高揚し、一徳一心の真義を理解し、惟神の道を奉戴し、特に国外蒙古人に対し、建国の矜持を範示する如く錬成するもの」とした[73]。「惟神の道」の奉戴や天照大神の崇敬といった日本を頂点とする精神的な日満一体化がモンゴル地域でも課題となっていた。そこで協和会興安総省本部は成吉思汗廟の落成式典にあわせて「蒙古青少年総崛起大会」を開催すると1944年9月に発表した[74]。

1944年10月7日午後4時、成吉思汗廟が鎮座する汗山の東麓、洮儿河畔の草原にモンゴル青少年約5000人が集まった。このとき結集したモンゴル青少年は、協和会興安総省本部の招集した青年190人、各学校の青年団200人、各青年訓練所25人、指定青年訓練隊180人、各学校の少年団46人、少年行動隊代表10人、音楽隊25人、熱河省の青年団20人、錦州省の青年団20人、龍江省の青年団25人、吉林省の青年団5人、濱江省の青年団5人、「蒙疆政権」と国外の青少年12人、ホルチン右翼前旗の青少年団4000人、建国大学学生40人、陸軍学校生徒・陸軍軍楽隊〇〇人（伏字）であった。そのうち興安総省内から参集した青少年360人は、各旗・県から成吉思汗廟のある興安街まで長途を行軍した。彼らは「地方動員部隊集結要領」に照らして準武装化した分隊に組み入れられ、13個小隊の6個中隊に編成された。興安協和会青少年本部は、この「総崛起大会」を試金石に決戦下でのモンゴル青少年の実力を養成することを企図していた。長途の行軍を果たした青少年360人は、各機関首脳や青少年400人に迎えられて興安街に入った[75]。彼らは洮儿河畔にゲルを張り、6日間にわたって寝食を共にした。午後7時、幕営地で「野営団結成式」が執り行われた。野営団総司令のボヤンマンダホ、副司令の白濱晴澄の訓示の後、直ちに「野営訓練」が始まり、夜間に夜襲と防衛戦の基本演習、翌早朝に進軍行進をおこなった[76]。

10月8日、成吉思汗廟の「落成式典」が盛大に挙行された[77]。午前10時10分、成吉思汗廟の本殿前に祭主バトマラプタン、ボヤンマンダホ、マニバタラ、各界幹部90人、祭務従事者14人、各地モンゴル民衆代表500人、奉建委員会・祭典籌辦局の役職員40人のほか、来賓で「蒙疆政権」代表団（団長は興蒙委員会委員長の松王）、関東軍各部隊長、「満洲国」各大臣、協和会、放送局など関係機関代表50人、興安各機関代表100人、外来各機関代表75人、興安各学校学生2500人、興安各部隊兵士・民衆約2000人が参列した。式典の次第は、「日本僧侶」が修祓、迎神、献饌、祝文奏上を行った後、祭主バトマラプタン、参列者、来賓、民衆代表の順で玉串を奉奠し、送神、撤饌して終了した。式次第を見るかぎり、「神道式」で執り行われたものと思われる。続いて、参列者一同が「大東亜聖戦」の必勝を祈念した後、バトマラプタンから寄付金の提供者や工事の協力者に感謝状が贈呈

された。午後からは「成吉思汗奉安典礼」が挙行され、モンゴルのシャマンがチンギス・ハーンの聖霊を祀った。また、午後7時から本殿前で「音楽大会」が挙行され、「蒙疆政権」の徳王府楽団が「チンギス・ハーン頌歌」を奉じた。ちなみに、頌歌を作詞したのは徳王府秘書官のサイチンガであった。サイチンガ（のちにサインチョクトと改名）はかつて日本に留学し、内モンゴル現代詩の基礎を築いた人物として知られる。そのサイチンガの作詞した頌歌は、「満洲国」や「蒙疆政権」の各地に向けてラジオで特別中継された。さらに音楽学院の管弦楽団、ハルピンと通遼の吹奏楽隊、協和青少年楽隊、興安総省立国民高等女学校の鼓笛隊も、それぞれ戦意高揚の曲目を演奏して青少年野営団の士気を鼓舞した[(78)]。

翌9日は「臨時大祭」が挙行された。この日は前日にかわって「モンゴル式（チベット仏教とチンギス・ハーン祭祀儀礼）」で執り行われた。儀礼次第は、つぎの通りである。午前9時30分、参列者900人余が日満国旗を掲揚、皇居を遙拝してから、祭主バトマラプタンが祭詞を読み上げ、絹布や各種供物を順に供え、祭火、祭馬、祭兵の儀礼と献酒を行い、続いてチンギス・ハーンが天から授かったという槍を神前に供え、献灯、献炉を行った後、聖歌を合唱して午前11時50分に終了した。午後からはモンゴル相撲や競馬、演劇などが催された[(79)]。ここまで通してみれば、両日の落成式典は、神道式→シャマニズム→仏式・チンギス・ハーン祭祀儀礼の順に進められたことが分かる。この順序は、まさに「国家神道」を頂点にチンギス・ハーン崇敬を利用してモンゴル人の精神世界を一元的に統制しようとした磐井文雄たち「蒙古通」の議論にあった精神世界の序列と符合する。一連の式典順序からも、成吉思汗廟に負わされた思想統制の意味合いが垣間見える。

続いて10月10日午前9時、野営訓練中のモンゴル青少年4000余が成吉思汗廟の本殿前に集まり、国内外の来賓の臨席を得て「蒙古青年総崛起大会」が挙行された。大会総司令ボヤンマンダホに敬礼、全員点呼の後、日満国旗の掲揚、「君が代」と「満洲国歌」の斉唱、宮城と帝宮の遙拝、「大東亜戦争」勝利の祈念をおこなった。ついでボヤンマンダホが「満洲国宣戦詔書」を奉読して訓示をおこない、青少年代表が「青少年団綱領」「決戦信条」を宣誓して開会式は終了した。そして午前11時から、青年団・青訓の代表、軍官学校学生の計2400人が準武装し、成吉思汗廟の鎮座する汗山で野戦攻防演習を行った。汗山に対峙した各部隊は、双方が一進一退、煙塵滚々として殺気騰空する激烈な白兵戦を披露してみせた。この模様を『蒙疆新報』の記事は次のように伝えている。天にいるチンギス・ハーンは、この勇猛精鋭なモンゴル健児の奮闘する勇姿を見下ろし、顔をほころばしているだろう、と[(80)]。確かに、この野戦演習を見たものは「チンギス・ハーンの軍団」を思い起こしたであったろうし、青少年たちもその自負を持っていたに違いない。だが、成吉思汗

廟が明治神宮に倣ったものであることを想起したとき、むしろ明治神宮外苑の競技場で1943年10月に開かれた「出陣学徒壮行会」が想起されるのである。その意味で、成吉思汗廟はモンゴル青少年の戦時動員、戦闘組織化を後押しするものでもあったことを強調してもよかろう。翌11日、青少年野営団は興安学院の展覧会を訪れ、モンゴル青少年の時局に関する作品を参観し、12日に野営団解団式を挙行して解散した。

もっとも、成吉思汗廟の落成によって日本側の企図したように戦時動員が進んだ訳ではない。成吉思汗廟奉建委員会は廟の落成にあわせて『成吉思汗箴言集』なるモンゴル語パンフレットを作成・配布している。その序文には、多くの史書、伝記からモンゴル人が遵守すべき箴言を採取した。その箴言とは、第一にチンギス・ハーンの命令文から、第二にチンギス・ハーンの大臣・諸将たちの上奏文からそれぞれ優れて重要なものを採録した。各方面に分配して日常のあらゆる行動に参照としよう、とある[(81)]。モンゴル人エリートたちが成吉思汗廟の創建を望んだのは、チンギス・ハーンの崇敬を通してモンゴル人に「民族固有の精神」を取りもどさせるためだった。ただ、それまで喧伝された「民族固有の精神」とは、「尚武」や「武威」など抽象的で曖昧模糊としたものであった。そこで、奉建委員会のメンバーたちは、モンゴル古典のなかから民族の倫理・道徳として採用されうる「ことば」を紡ぎ出し、「民族固有の精神」に具体性を与えることで「モンゴル人」を鋳造しようと『箴言集』を編集したのであった。その内容の検討は今後の課題としたいが、当然そこには「教義」をもたない「国家神道」では回収できない重厚な内容が備わっている。こうしてみてくれば、モンゴル、日本それぞれの思惑が重層的に込められた成吉思汗廟は、まさに同床異夢の造形であったといえよう。

お　わ　り　に

1930年代初に「チンギス・ハーン紀念大会」が北平蒙蔵学校で強行されたとき、すでにモンゴル青年の脳裏にはチンギス・ハーンのモニュメントを新造する構想があった。それが具体的な形となって現れてくるのは、「満洲国」においてであった。「満洲国」の対モンゴル政策がモンゴル人に妥協的な政策へと変更になると、チンギス・ハーン崇敬追慕の動きが鬱勃として起こるのであった。モンゴル人たちは「チンギス・ハーン神社」という語りで「満洲国」の尊孔・関岳祭祀と同等の扱いを求めたのであり、その点では神道や儒教など祭祀儀礼と宗教を切り離すことによって伝統的価値の再編をめざすという共通した手法を見出すことができる。また、チンギス・ハーンの国家祭祀化を求めたことは、「満洲国」の国体まで射程に入れた挑戦であった。

「チンギス・ハーン神社」の新造は、日中戦争の勃発によって誕生した「蒙疆政権」の徳王も考えていたことだった。伝統的チンギス・ハーン祭祀としての八白宮とは別に新たなモニュメントを創建するという発想は、明治天皇陵と明治神宮という関係を想定していたのかもしれない。また、日本側からも神社創建に同意する意見もあった。神道家の小笠原省三は、海外の神社にはその土地の「始祖および建国功労者」を祀るべきという持論から、チンギス・ハーンを祭神に祀ることに積極的だった。さらに、1940年あたりから「満洲国」や華北占領地域で日本民族の卓越性が強調され、「惟神の道」への信奉が強要されてくると、モンゴル人を「国家神道」へ接続するため、日本側もチンギス・ハーン崇敬に注目するようになってくる。

戦争の長期化、加えて1941年の独ソ戦開始は、ソ連や外モンゴルと国境を接する内モンゴル地域の政策を転換する契機であった。「満洲国」と「蒙疆政権」の枠組みを超えてモンゴル人の意識を統一するため、成吉思汗廟の造営が1941年末に決定された。実際に着工したのは、1942年5月5日のことであった。造営にあたっては、献金、労働奉仕というかたちでモンゴル民衆の参加が促された。結果として、このような運動形態がモンゴル人をして精神的アイデンティティの獲得に繋がった。だが、そのアイデンティティは日本側が意図したような日本との「同化」に向かうものではなく、モンゴル人としてのそれであった。

成吉思汗廟がもつモンゴル人動員の機能に着目したのが、満洲帝国協和会であった。「兵営国家・満洲国」の建設を目指す協和会は、成吉思汗廟の落成式にあわせてモンゴル青年の戦時動員、軍事教練を敢行した。「神社」から「廟」という名称の変更は、成吉思汗廟が神社建築としては余りにも逸脱したものであったからに違いないが、その機能を見れば日本側はこれを「神社」、しかも明治神宮を意識して作り出したのだった。

最後に、チンギス・ハーンのモニュメントにかんする戦後の状況についても触れておく。1954年春、戦火を避けて移転していた八白宮が、15年ぶりにオルドスへ戻ってきた。中国共産党はこれを機に天幕式の八白宮を廃し、新たに固定式の「成吉思汗陵」をオルドスに建立した。できあがった陵の意匠は、成吉思汗廟のそれをほぼ全面的に踏襲したものであった[(82)]。さらに話を2006年に移せば、モンゴル国ではチンギス・ハーンの即位から800年を記念して、ウランバートル市内の中心スフバートル広場に面する政府宮殿前にチンギス・ハーンの銅像とそれを安置する「宮殿」が建立された。高さ5メートルのチンギス・ハーン像を安置する「宮殿」は、正面中央に「円頂方基」の大殿がそびえ、左右対称の両翼に小殿を配するものであった。その外観は成吉思汗廟のそれと酷似しており、チンギス・ハーンのモニュメントの祖型として成吉思汗廟の意匠が今日まで受け継がれていることが

うかがえる。ちなみに、成吉思汗廟にはティムールとフビライの像も併置する構想があったようだが、現在ウランバートルにあるチンギス・ハーン像の両翼には、オゴデイとフビライの像が立っている。

註

(1)『内蒙古日報（漢文版)』2006年5月31日。
(2) 満洲国史編纂刊行会『満洲国史・各論』満蒙同胞援護会、1971年1月、1283頁。
(3) 白拉都格其ほか編『蒙古民族通史』第5巻下冊、2002年11月、452頁。
(4) 涂波・那木斯来扎布・佟巴図「烏蘭浩特成吉思汗廟」『内蒙古文史資料』第34輯、1989年12月。任其懌「従神社看日本帝国主義対内蒙古地区的文化侵略」『内蒙古大学学報（人文社会科学版)』第37巻第6期、2005年11月。
(5) 前掲の涂波（1989年）は1933年（康徳7年）5月5日、白拉都格其編（2002年）と任其懌（2005年）は1941年5月に着工とする。
(6) 出口王仁三郎『霊界物語』特別篇･入蒙記（原題『王仁蒙古入記』、1925年2月)、天声社、1970年9月、237頁。
(7) 安丸良夫編集･解説『出口王仁三郎著作集』第2巻･変革と平和、読売新聞社、1973年6月、444頁。
(8) 笹目恒雄『神仙の寵児』全8巻、国書刊行会、1991年7月。
(9) 警視総監丸山鶴吉→内務大臣安達謙蔵「蒙古人学生ヲ収容スル学園ノ開園式挙行ニ関スル件」1931年2月2日、外務省史料 I.1.2.0.2『在本邦中国留学生関係雑件』。
(10) 警視総監宮田光雄→内務大臣望月圭介「蒙古人及蒙古関係邦人転入ニ関スル件」1928年12月6日、外務省史料 A.6.1.2.1-16『満蒙政況関係雑纂　呼倫貝爾ノ部』第3巻。前掲『神仙の寵児』第5巻、68-69頁。
(11) 警視総監宮田光雄→内務大臣望月圭介「蒙古学生入京ニ関スル件」1928年12月27日、前掲『満蒙政況関係雑纂　呼倫貝爾ノ部』第3巻。
(12) 前掲『神仙の寵児』第3巻、50-51頁。
(13) 警視総監宮田光雄→内務大臣望月圭介「蒙古人及蒙古関係邦人転入ニ関スル件」1928年12月6日、前掲『満蒙政況関係雑纂　呼倫貝爾ノ部』第3巻。
(14) 警視総監丸山鶴吉→内務大臣安達謙蔵「蒙古人学生ヲ収容スル学園ノ開園式挙行ニ関スル件」1931年2月2日、前掲『在本邦中国留学生関係雑件』。
(15) 拙稿「チンギス・ハーン祭祀と日中戦争」『近きに在りて』第51号、2007年6月、105-118頁。
(16) 警視総監丸山鶴吉→内務大臣安達謙蔵「留日蒙古学生会ノ機関誌発行ノ件」1931年2月16日、前掲『在本邦中国留学生関係雑件』。
(17) 塚本関東長官→幣原外務大臣「東北新政権樹立問題、吉林省臨時政府組織および蒙古独立運動等時局に関する政治策動の情報について」1931年10月8日、外務省編纂『日本外交文書』満州事変・第1巻第1冊、1977年3月、335頁。
(18) 片倉進「覚書『内蒙古独立運動史』」『満洲と日本人』第5号、1977年4月、97頁。
(19) 警視総監藤沼庄平→内務大臣安達謙蔵「留日蒙古学生帰国後ノ動静並ニ元経国学園主瓜

生喜三郎ノ動静ニ関スル件」1932年6月10日、前掲『在本邦中国留学生関係雑件』。

(20) 片倉衷「満洲事変機密政略日誌其五」『現代史資料』7・満洲事変、みすず書房、1964年4月、367–370頁。

(21) 関東軍司令部「対満蒙方策（第四次案）」（1932年5月21日）『現代史資料』11・続・満洲事変、みすず書房、1965年7月、636–639頁。

(22) 大本七十年史編纂会『大本七十年史』下巻、宗教法人大本、1967年8月、273–278頁。

(23) 前掲『満洲国史・各論』、118頁。

(24) 松室孝良「蒙古国建設に関する意見」（1933年10月）『現代史資料』8・日中戦争1、みすず書房、1964年7月、449–463頁。

(25) 松室孝良「満洲国隣接地方占領地統治案」、前掲『現代史資料』8、472–485頁。

(26) 関東軍参謀部「暫行蒙古人指導方針要綱案」、前掲『現代史資料』8、447–448頁。

(27) 菊竹實蔵『経蒙談義』1941年12月、20–21頁。菊竹の活動とその著書『経蒙談義』については、鈴木仁麗「偽満州国的興安省与菊竹実蔵—談『経蒙談義』」（『衛拉特研究』2005年第2期）に詳しい。

(28) 任秉鈞「参加蒙蔵学校学生会紀念成吉思汗大会感言」『蒙古』第6期、1930年5月、15–16頁。

(29) 遊佐徹「蠟人形・銅像・肖像画—中国近代における身体と政治の関係についての覚書（2）—」『岡山大学文学部紀要』第47号、2007年7月、69–83頁。

(30) 前掲『経蒙談義』、22–23頁。

(31) 蒙政部総務司文書科編纂『第一回興安各省省長会議議事録』1936年12月、191頁。

(32) 善隣協会編『蒙古大観』改造社、1938年10月、266–270頁。

(33) 赤松智城「現代蒙古青年の宗教意識」、赤松智城・秋葉隆『満蒙の民族と宗教』大阪屋号書店、1941年3月。

(34) 満洲国政府「蒙古民族指導の根本方針」1936年5月20日、前掲『現代史資料』11、948頁。

(35)『東京日日新聞』1937年10月10日。

(36) 小笠原省三編『海外神社史』海外神社史編纂会、1953年10月、235–236頁。

(37) 民間の神社関係者である葦津耕次郎や小笠原省三は1925年、朝鮮神宮の竣工を目前にして、神宮の祭神に異論を唱える。たとえば、小笠原は祭神に朝鮮の族祖檀君を加えるよう主張したが、内務省と朝鮮総督府の反対で実現しなかった。

(38)『満洲日日新聞』1943年10月5日。

(39) 前掲『海外神社史』、236–237頁。

(40) 1942年4月に「満洲国」を訪問した徳王は皇帝溥儀に面会した際、「天照大神を自分の祖先として迎え」て建国神廟に参詣する溥儀を非難したというエピソードがある（愛新覚羅溥傑『溥傑自伝』中国文史出版社、1994年4月、61頁。日本語訳には丸山昇監訳、金若静訳『溥傑自伝』河出書房新社、1995年1月、101頁）。

(41) 厚和蒙古研究会『興蒙推進要綱』1942年1月、94–95、120–123頁。

(42) 島薗進「19世紀日本の宗教構造の変容」『岩波講座・近代日本文化史』2・コスモロジーの「近世」、岩波書店、2001年12月。桂島宣弘『幕末民衆思想の研究—幕末国学と民衆宗教』文理閣、1992年4月。

(43) 前掲『出口王仁三郎著作集』第2巻、422頁。

(44) 前掲『経蒙談義』、21–24頁。

(45) 在張家口総領事渡辺信雄→外務大臣松岡洋右「蒙古独立運動ヲ目的トスル『蒙古青年結盟党』ノ策動ニ関スル件」、外務省史料 A.6.1.2.1-14『満蒙政況関係雑纂　内蒙古関係』第5巻。
(46)『蒙民厚生会留学生会報』第3号、1944年11月、135頁。
(47) Köke tuγ（青旗）, 1942. 5.9.
(48)『蒙疆新報』1942年5月12日、5月13日。
(49)『蒙疆新報』1942年7月28日。
(50) 蒙古自治邦政府蒙旗建設隊『蒙旗建設隊現地工作状況中間報告書』1942年、83、146頁。
(51)『蒙疆新報』1942年7月28日。
(52) 村松伸「都市の『中国性』」、加藤祐三編『近代日本と東アジア―国際交流再考』筑摩書房、1995年7月、139-170頁。
(53) 前掲「チンギス・ハーン祭祀と日中戦争」、105-118頁。
(54) 石川禎浩「死後の孫文―遺書と紀念週」『東方学報・京都』第79冊、2006年9月、48頁。
(55) 拙稿「『蒙疆政権』の留学生事業とモンゴル人留学生」『歴史研究』（大阪教育大学）第38号、2001年3月。
(56) 内藤湖邦「蒙古民族教育文化論」『興亜教育』第2巻第10号、1943年10月。
(57)『蒙疆新報』1943年4月23日。
(58)『蒙疆新報』1943年4月27日。
(59)『蒙疆新聞（晋北版）』1943年4月28日。
(60) Köke tuγ, 1943.6.3.
(61) Köke tuγ, 1942.8.1, 1944.6.13.
(62) Köke tuγ, 1942.4.25.
(63) Köke tuγ, 1942.12.23.
(64) Köke tuγ, 1944.5.3.
(65) B・ツェベクマ『星の草原に帰らん』NHK 出版、1999年8月、71-72、79頁
(66) 川村強「王爺廟」『満州建設雑誌』第24巻第6号、1944年7月、227-230頁。
(67)『蒙疆新報』1944年10月10日。
(68) 西澤泰彦「『満洲国』の建設事業」、山本有造編『「満洲国」の研究（新版）』1995年4月。
(69) 前掲「烏蘭浩特成吉思汗廟」、281頁。
(70) 当時のモンゴル人がティムールに言及する例は少ないが、世界的に見ればチンギス・ハーンとティムールはセットで扱われることが多かった。例えば、1928年に公開されたソ連のサイレント映画『アジアの嵐』は世界中でヒットしたが、チンギス・ハーンの末裔に設定された主人公の名が「ティムール」であった（ソ連公開時の主人公の名は「バイル」であったが、ドイツの配給会社が改名して世界的に定着したようだ）。
(71)『蒙疆新報』1944年10月10日、10月25日。
(72)『蒙疆新報』1944年10月25日。
(73)『満洲年鑑』康徳12年版、満洲日報社、1944年12月、68-70頁。
(74)『康徳新聞』1944年9月15日。
(75)『蒙疆新報』1944年10月31日。
(76)『蒙疆新報』1944年11月1日。
(77) 成吉思汗廟完成の一連の式典行事については、とくに明記しない限り、「成吉思汗廟落成

臨時大祭・盛典参加記（2）～（4）」（『蒙疆新報』1944年10月25日、10月26日、10月27日）に拠っている。

（78）『蒙疆新報』1944年11月1日。

（79）『蒙疆新報』1944年10月11日。

（80）『蒙疆新報』1944年11月1日。

（81）Činggis qaγ an-u surγ al-un tegübü（成吉思汗箴言集）、no date.

（82）楊海英『チンギス・ハーン祭祀　試みとしての歴史人類学的再構成』風響社、2004年12月、304頁。